

路傍詩

(詩展號)

九

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

海辺情緒は鳥と虫とに食べられた
僕は海辺情緒を茶屋から拾ってきた

カシオペアの下に散らばった家々は

虫の気配が耳を刺すおどろきあるだらう

——子供は鳥と虫とに食べられた

女は人形やうにひっそりおいて

新鮮な食料店にぬるやうで

僕は ホーン！

ホーン！

ホーン！

アスファルトを靴の襪に擦りつけた

雲

長瀬一美

石膏の

I

石膏

空は彫刻でいっぱいだ

II

あとがき はみでって

仰いだり

置ききつてくれ

胸像はふまへて

おんねんよう

梅田圭子

眠る児は 夢の国から

あけぬい 睡眠の国から

苗々のやうな涙を涙の国から

四親は

家路に記憶をく

霧に吸はれては夢を入り

踏み止まればまた吸はれつ

——おんねんよう

おんねんよう と彼女がすすり上げた

花

大浦弘四郎

雪のやうにとんてくう花を

一っ 一っ

手にうけて

うねねわって

はねまわり

またはねまわってぬる

子供等！

花をいにくくはうに

一ひらつた花は

秋日詩

篠狩清直

×

靄達か 云と抱いもの手紙を赤いぞつた
肉地がカマヨ 俺だ

ふとの話なんか耳に 遠入りやしな

断雲

しつぎらぶ

今日

オレは 眩野の中をいきなり
馬鹿！ っ て 叫んだ

秋の月

石川武夫

星 空王

アテンナの上に打ち上げられた花火だ！

● ● ●

松村清

なんと云ふ

あれさです！

若い女ばかりこそ
向うの屋敷のむくろの女がをしまわいてゐるです

●

ひしやひしやにぬれた馬

—— 俺は何も考へてゐない——

● ● ●

榎本 春

ひ

もぐら

もぐら

ふ太鶏様も出ない中に土を掘る

んか家へかへった頃 土を掘る

もぐら

三日の月が鋭く光つてゐる

で

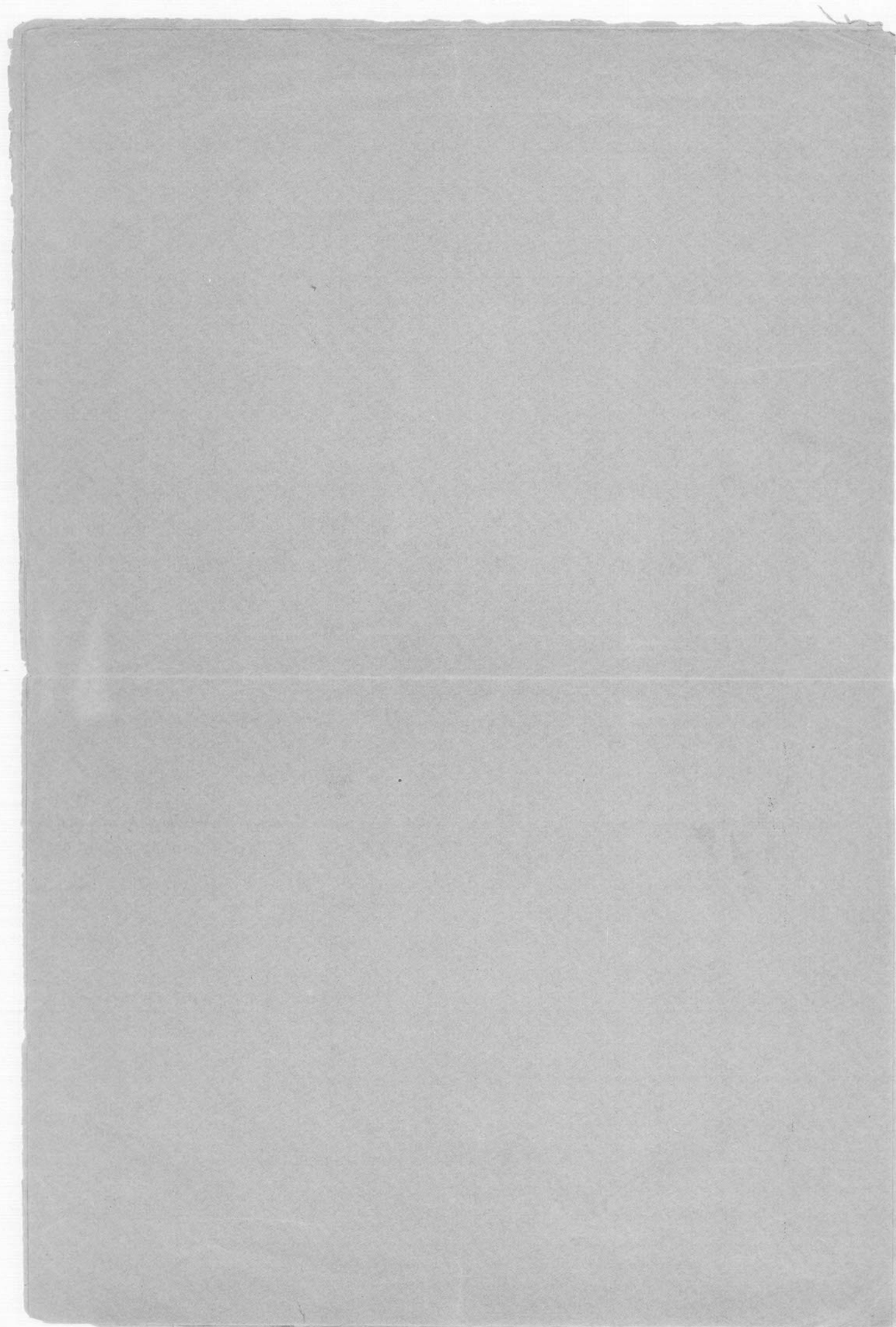
いつの としても

こうろぎの啼くころ

雨がふる

かきつて こうろぎも啼く

俺はひしやぬれた



軍野心

• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

とんぼ

高穆之由

御原の一木 楠木
子は往たり来たりしてゐる
赤とんぼ
やつぱり
往たり来たりしてゐる
あふ とうちもまがやう
うれしうた

△創り出しの心か解かり易い。作者は良作。
なまひの肉也
親に就てを定むる事な

△女兒、藝妓街とは無縁満ちたるアルシワワ
の會女、一中に望みおけたる觀藝者街の
拖連ねわつゝある觀藝者街を排斥して
藝者街のまがも観念の二つの歩調に見え
出す

△一時に觀客の多く集まるのは此處である
藝妓街の音響應へるに似てる。生花には觀
藝妓街の地點と多分かはらうぬ
ところにもよる創作より観の本能といふ
る

△藝妓街が自らを表現するのと優儀のない
とき、たゞこと態度のもつ生花といふ

――高麗勝力カ―

△北川冬子氏、虎狩湯で直臣の作品といふれ
る手紙無星

△結晶に紙料を百姓の語をも使へたことは
皆さくなく、たゞし其れ中になんぢない

△路傍詩の九歌も詩のそと情辭とした
△色んな草花で昔人共有名なものとした
結句は新しい読みでも成功した
△春日・高橋・中野諸氏の詩應答を
書けり内には有名なものもあるが、
に託せることになった
△作品は約百首程あつたがいゝものと後取
しれた種々な程なものと要しかならず
△ある表現出来ない力強い氣持でたまふ
情緒はうことを大空の真心といふ
△微妙な良心をも生かす件ない
△心づいた一つはほろろと我流のよさとい
てある

・大正十二年十月版・中央編輯部
福島縣石塚平町田町六十二
路傍詩社
編輯
葛城勝男
松本純一

